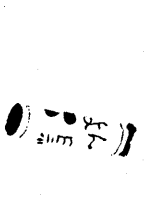
子どもによって育まれたもの

相原　貴史



私にとっての子どもとの暮らしが始まったのは二十年前にさかのぼる。とは言っても、それは仕事としてのお付き合いである。

小学校の教員になることを志してから二年後のことである。

もともと工作（どちらかと言うと分解）の好きだった私は、工学部の電子工学科に進んだ。好きな機械いじりを続けて、将来は鉄腕アトムのようなロボットを作り上げたいなどと夢見ていたのである。

しかし、夢はすぐに崩れていった。まだパンチカードで入力するようなコンピューターしかなかったというのもあるが、機械と接するほど人間の温もりから遠ざかる気がし、私にはそこに夢の

ある世界を見いだせなくなっていったからである。

結局卒業後、工学への道に見切りを付け、人との関わりによって新しいものを築いていく世界の中で、私が一番夢があると感じた小学校教員になることをめざした。そして、ようやくその職につくことができたのが二十年前のことである。

初めて公立学校に赴任して担任したのが二年生。都心の小学校であるので、一クラスの人数も三十名足らずの学級であった。自分の背の半分くらいしかない子ども達。ちょっと激しく動き回ると踏み潰してしまうのではないかとも思われた。

その中に、まだ小学校生活に馴染めない男の子が一人居た。授業が始まっても席につくことができず、教室の後ろのそうじロッカーの上に登ってしまうなど、まるで動物園の猿を思わせるような身の軽さであった。

ちゃんと席に着く子ども達には授業を進めてやらなければならないと思う一方、その子がみんなと一緒に過ごしたいと思えるような雰囲気を作らなければならないとも考えた。

「A君は机に向うのは苦手だけど、運動は抜群だね。あんなに高い所も登れるのだもの」

などと、他の子ども達にもその子が認められる下地を作るように心がけた。その方向で間違ってはいないと思う一方、経験のない私には不安でもあった。それに教室に居てくれればいいのだが、うっかりするとどこかに居なくなってしまうのである。

その行き先は、併設されていた特殊学級の教室であった。引き取りにいくと、その教室の先生が

「先生、お茶を飲みながらゆっくりしていって」

とおっしゃる。Aのここでの様子を見て欲しいとの示唆であったのだ。

驚いたことに、Aは、教室では見せないような

優しい、それに加えて自信のある目をしていた。特殊学校の子ども達に頼りにされて、その子ども達の面倒を上手にみているのである。

「教室に居なくても、必ずここに居るのだから安心してくださいな」

そうおっしゃられた特殊学級の先生のことばに、ほっとする一方、次の不安が芽を出した。「未熟な私の教育では、子どもに足りないことが多過ぎるのではないか」と。それに対し、

「先生が、他の先生（経験年数に関わらず）より、クラスの今の子ども達を一番よく知っているのですよ。自信をお持ちなさい」

ともおっしゃってくださった。

それから間もなくである。Aが、みんなと一緒に楽しく学習を進められるようになったのは。

私のこの二十年間の子ども達との暮らしの支えになっているのは、この時の特殊学級の先生のことばと支えである。この先生に居ていただけたから、今もこうしていられると言っても過言ではないだろう。

私が父として自分の子どもとの暮らしが始まったのはそれから二年経ってからである。

子どもは台風と共にやって来た。とは言っても、台風の中で拾ってきたわけではない。……はずだ……台風の来た翌日に、予定よりも一か月早く産まれたのである。そのため、産まれてすぐに産院から日赤のセンターへ。小さな酸素ボンベの付いた小さなケースに入れられて、まるで何かの荷物のように手に下げて運んで行った。これが人間を運んでいる姿とは誰も思わないであろうというような格好である。

病院での娘の姿は、さらに悲惨なものであった。小さな体にいっぱいの生体反応を感知する端子が取り付けられ、そこから何本ものコードがつながれていた。そして、刺したら向こうに付き出

てしまうのではないかというような細い足に、点滴の針が付けられていた。本当にちゃんと生きてるのだろうかと疑われるような姿であった。

でも、やはり自分の娘となると、きっとちゃんと育つと信じて疑わないから、親というのは不思議なものである。ほとんど毎日のように、勤めの後病院に通い、娘の姿をガラスごしに眺めたり、写真を撮ったり、声に出さない声をかけたりしていた。

日が経つにつれ、娘とつながれているコードがはずされていき、人間らしい表情が見られるようになってきた。そして、退院。最初は看護婦さんに渡された時、まるでシャボン玉を渡されたような恐ろしさであった。持ち方を間違えたら壊れてしまうのではないかと感じたのである。

でも、健康に育ってくるにつれ、私の目は娘から離れていったように思う。産まれた時のことを考えれば、多少のことがあっても大丈夫だという感覚がどんどん増してしまったからであろう。

幼稚園から小学校低学年位の時になると、もう娘と会うのは日曜くらいなものになってしまった。学校の子どもにかける時間の方が長くなってしまい、学校二対家庭一という時間配分が常となってしまった。そのため、とうとう娘には、日曜の夜、

「また来週ね」

と言われるようになってしまった。

それでも、確かに娘は育った。今は百六十五センチメートルもの体をごろごろさせ、あのケースに入っていたことなど想像もつかない体格である。

でも本当にそれでよかっ

たのであろうか？

自分の子どもも、学校でみる子どもも、子どもにかわりはないのである。もっと父親としてするべきことがあったのではないだろうか。この原稿を書いている間にも、刻々と娘は成長していっている。今ここでしておかなければならないことはないのだろうか。

親としてだけではなく、仕事としても子どもと関わるこの職業についているからこそなのか、何か自分に問いなおさなければならない感覚に陥る。学校では一クラス四十人、学年で百二十人もの子どもがいる。家では一人である。一人にかける比重を考えたらこれでよかったではないかと思う一方で、揺れる自分があるのである。

ただ、教師は学校にいる子どもにとっての親になってはいけないのではないかとも最近思う。親になってしまうと期待も大きくなってしまい、「もっと」という思いを強く持ってしまうのである。それでは、子どもの自由な発想やその子らしい成長への芽を見落としたり摘んだりしてしまうからである。社会人の男としてのこの見方は、家庭でも必要なはずだ。しかし、これは私が教員ゆえに考えるのかもしれないが、子どもを育てるということに対し、家庭人の時の男と社会人の時の男とでは違った役割があるのではないかと思う。

今、世の中の子どもの割合が少なくなってきている。動物としての本来のあり方とは逆行している。もう一度、子どもに対する男としての役割を見直す時が来ているのではないだろうか。

（お茶の水女子大学附属小学校）